

「楽しい」から「面白い」への支援をめざして

青少年健全育成領域 澤 美恵子

概 要

今日、我が国では少子高齢化が進み、平成 17 年より人口の自然減少が継続している。また、出生数、合計特殊出生率の低下を背景として、同胞がいない子供たちが多くなっている。こうした状況の中で、今の子供たちは、子供同士のつながりが弱くなり、いじめなど問題行動を起こしやすく、そのことが社会問題にもなっている。また、情報技術の急速な発達等を背景に、親子の間でも相互の理解がすれ違う場面も多発傾向にある。こうした子供たちを取り巻く環境の変化を背景にして、今日では、学校、家庭、地域住民等が連携・協力して、地域全体で子供たちの成長を見守る体制を整備することが強く求められている。平成 27 年 12 月の中央教育審議会答申（地域学校協働答申）においても、学校を核として、学校と地域住民が協働して子供たちの学習・体験活動の機会を充実し、社会総がかりでの教育の実現を目指すことを提言している。

最近、子供たちを対象としたイベントにおける参加者へのインタビューを聞いていると、たまに「面白かった」という子供がいるが、ほとんどの子供は一樣に「楽しかった」と笑顔で答えるのに違和感をもっていた。そこで子供たちを対象とする県内外の地域ぐるみの取組事例を見学する中で、小学生（高学年）の男子に「楽しい」と「面白い」の違いを聞いてみると、「『面白い』は、『楽しい』が 10 個集まったくらい」と答えてくれた。また、女子大生も「楽しいと面白いは違う」と答えたことから、今の子供たちは「楽しい」と「面白い」を敏感に使い分けていることが推測できた。

人が楽しい、面白いと感じるのは、脳内の 3 大快楽ホルモン（ドーパミン、ノルアドレナリン、セロトニン）の働きによる。また、快楽ホルモンが分泌されると、集中力が向上する、やる気がおきる、アイデアがわく、能率が上がるなど、身体に良い変化が起きるといわれている。笑ったり、良い睡眠をとったり、バランスの良い食事をとったりすることで、快楽ホルモンの分泌を増やすことができることから、子供たちとの活動を展開するに当たっては、規則正しい生活態度を養い、子供たちが笑顔に溢れ、ポジティブに行動・学習できるよう意図的・意識的に支援することが大切である。

次の時代の担い手である子供たちが健やかに成長していくためには、地域の多くの人たちとの出会いや交流の中で、相互に刺激し合いながら、様々な体験を積むことが大切である。我が国は現在、長寿社会を迎え、人口の高齢化が急速に進展しているが、元気な高齢者や意欲のある高齢者も増えている。特に、60 歳以上になると女性の人口が増える中、女性たちがそれぞれの得意分野を生かし、地域において子供たちの学習・体験活動の充実・支援に積極的に関わっていく必要があると考えている。